慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	十九世紀獨逸文獻學派に就いて
Sub Title	
Author	山下, 昌孝(Yamashita, Masataka)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.1 (1937. 4) ,p.133- 145
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370400-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

十九世紀獨逸文獻學派に就いて

山下昌孝

はしがき　本篇は史學史に多大の興味を持たれてゐた西洋史學科學生山下昌孝君が昭和九年三月提出せられた未完の報告である。同君は爾來病を得て療養中の處遂に昨十一年十二月七日逝去せられたので、記念のために之を掲げる。（間崎生）

序論　文獻學に就いて

歴史學は具體的事實に卽しながらしかも終始一貫事實にのみ躊躇する事なくして、その事實を更に高い史的關聯にまで進ましめんとする所にその特色を有する。卽ち史學は幾多の史的事實のうち他に影響を與へるもののみを選擇するのであつてかゝる影響を與へるものは一般的聯關に關係付けられてのみ明かに決定されるのである。悠久極りなき吾人の歴史生活に於て種々なる姿を取つて現はれてゐる主要傾向卽ち所謂イデーを把握して時代の概念を明かにし、この時代を支配する一般的傾向に對して如何なる價値ありやと云ふ觀點からして具體的事實は選擇され整理されるのである。而してこの主要傾向によつて把握された各時代は互に獨自な立場を取るが二元的に相反する卽ち進歩と退歩と云ふが如き對立のうちに置かれるのではなく、全體的な史的發展のうちにそれぞれ聯關を保つ事に依つて、宛も一つの生物に於けるが如き有機的全的關係に結ばれ、かくして各時代は一つの大なる系列をなして統合されるのである。具

體的事實は時代傾向に結ばれ、更にこの時代傾向を一つの史的推移の中に發展的に配列する事によつて無限に擴大されるのである。かゝる史的關聯による個物の統合整理と云ふ所に歷史の學が成立する。されば史的研究に於ては具體的事實を個々に確認せんとする努力とこれを一つの史的發展の流の中に統合せんとする努力とが同時に行はれるのである。卽ち考證と考察の二分野があるのであるが、しかもこの兩者は密接な相關關係の下にあつてその間には截然たる區別は立て得られないのである。多くの歷史家が個々の具體的研究に沒頭し考證に身を窶すのも結局は一の史的發展の下に全的の發展關係を考察せんとするための準備に外ならない。考證のみに終つては如何にそれが精密に行はれ數多く集積されたとしても結果は不完全なる過去の再現に終る。而して又考證を無視し或は考證の結果の恣意なる選擇に依る史觀の如きは

神學に赴くか、空漠たる哲學論に終るかして、史學の埒外に逸し去るのである。要は考證の基礎の上に綜觀の上層建築を築くのである。飜つて史學の發達を見るに事象の具體性を明かならしめんとする考證卽ち所謂史學研究に於ける實際的方法とこれを綜觀して考察せんとする方面とは異つた分野に屬するものの手によつて各々孤立して開拓された。前者は主として專門史家否寧ろ所謂史學補助學を專攻する者（總括的に文獻學者と呼ばれる）の手によつて發達せしめられ、後者は史觀の問題を中心とし主として哲學者の手に依つて論究せられ、之に對して史學者は寧ろ從屬的地位にあつた。從來歷史哲學の名で呼ばれたものは大部分この中に含まれる。而してこの實際・理論兩方面共に科學的取扱を受けるに至つたのは、十九世紀に入つてからであつて、實際的研究に於ては先づ文獻、文書の科學的研究が文獻學者及び史學者の手によ

つて史學の中に取り入れられて具體的研究の結果に一切の基礎を求めるの風を生じ、これがこの世紀の史學の著しい特徴となつたのである。次で十九世紀後半から二十世紀にかけて理論方面も神學、哲學の支配を全く脱して眞の意味での歴史認識論を生んで發展の概念によつて價値的に物を見んとするに至り、こゝに精神科學としての史學の基礎が確立されたのである。而してこの兩方面の結合卽ち文獻の科學的研究によつて復原されたものを發展の概念のもとに價値的に整理する、卽ち文獻學と哲學との複合によつて確實性と眞理性を得て、はじめて史學はその眞の面目を具へるに至つたのである。

『このころはじめて博識家と歴史家とまた史料研究家と思想家との關係が確定されそしてその協力が起されたことは、これもまたロマンティシズムの貢獻としてかれに感謝されなければならない。已に述べられたやうに、斯うしたことは十八世紀の間には見られなかつたところであり、そして、實を云ふならば、それはその以前には、イタリア人文主義のまたはアレキサンドリア主義のあの偉大な博識の時代にも決して未だ見られなかつた。』（クロォチエ『歴史敍述の理論及歴史』羽仁五郎譯　三六〇頁）

十九世紀の史學を強く特徴付けたこの具體性の研究にも亦二方面がある。その差は考證の對象となるべき史料の性質に依つて生ずるのであるが、一つは記錄されたもの卽ち所謂狹義の文獻であり他は原形のまゝ傳へられた具體的のもの卽ち遺物遺蹟であつて考古學的方面に屬するものである。文獻は既にそれ自身一定の說明的事實を保有し複雜な內容を物語つてゐるため、批判者の自由なる解釋を束縛しその取扱も極めて嚴正なることを要求されるが、そのため研究の結果にも具體性を增

すわけで、この點內容を明示せずして批判者の想像力による自由なる解釋を俟つて、はじめて內容を決定される考古學的方面は勢ひ消極的にならざるを得ない。ために史學研究の最も客觀的方面はこの文獻的方法によつて代表されてゐて綜合的考察を行ふ場合にもこの文獻研究の結果を離れては成立しないのである。歷史が科學として成立する時に當つて先づ文獻的手法の採用が行はれたのもこの故である。考古學的方法は文獻學的方法の補助としてか、文獻の皆無の場合にその效果を最もよく發揮するのであつて、歷史的に見ても文獻的研究の次に史學方法の中に取り入れられたものである。元來文獻學卽ち Philologie なる語はその中に史學に於ける實際的研究の一切を含んで居たのであつて、これが次第に發達して十八世紀に入りて Franz Bopp によつて比較言語が一の科學として獨立して以來、多數の歷史補助學を分科せしめ

たのであつて、從つて考古學一般もこの中に含まれるのである。而して史學はこの Philologie に全的に依賴しながらこの專門的研究はむしろ史學者以外の手に依つて開拓された事は前述の如くであつて、これが科學的研究法を取つて史學の領域にその地位を確立し所謂史的文獻學となつたのは、實に十九世紀の獨逸に於てであつた。Niebuhr がはじめて史學の立場からして文獻に對して科學的批判、解釋を下したのであつた。本論に入るに先立つて Philologie の意義を明かにしその歷史を概觀してそが如何にして成立し史學の具體的研究法を確立するに至つたかを明かにする事とする。

Philologie の意義。　Philologie はギリシア語 φιλόλογος の轉じて成つた φιλολογια から出た。φιλο 卽ち〔愛〕と λόγος 卽ち〔言語・學術〕の合したもので、その意は科學に對する熱情、文學的乃至科學的敎養を指したものであつてプラトーに

於て最初の使用を見る。次でアレキサンドリア時代になると學問の愛は卽ち古典研究を意味するに至りギリシア語ラテン語に對する經驗的文法正文批判並に文學史の見地に立脚する科學が創設された。Philologie はアレキサンドリアの文法學者の手によつてその原始の姿を與へられたものと云へる。下つてルネサンスには Philologie と云ふ語は更に擴大されてギリシア、ラテンの古事に關する凡ゆる知識に適用されるに至りそれが現今 humanisme と呼ばれるものである。十八世紀の末葉以後はこの語の意味は更に擴張された。Philologie は人間的精神の凡ゆる表現の研究を包含するに至り大にその領域を擴げたのであるが、これと同時にあまり多方面を包含したため學としての存立意義を失ひ、先づこの內から比較言語學が分立し十九世紀の中葉以後は考古學的方面に屬するものが次第に發達すると共に、分科してこゝに所謂狹義の文獻學があとに殘されたのである。一國語の文獻的知識を得るに必要なる研究の總てを指すものが卽ちこれである。そのうちには古典文獻學、東洋語文獻學、ゲルマン語文獻學、ロマンス語文獻學を含むのである。かくて Philologie は次の三分野に分たれたのである。

一狹義の文獻學（古典文獻學を中心とする）

二比較言語學

三考古學的諸科學

而して現今に於て Philologie なる語は英國に於ては比較言語學のみを指し Comparative Philology なる名稱を取り狹義の文獻學は古典文獻學が代つて Scholarship 或は Classical Study の語で表はされてゐる。大陸主として獨佛に於ては Philologie を以て狹義の文獻學を指し、考古學的方面もこのうちに含めて云ふのである。特にこの傾向は獨逸に强い。かく Philologie はその流れのうちに一切

の歴史補助學的のものを含み史學の具體性の研究は一つにこの流と共に發展したのである。以後本論に於て論ずる所は Philologie＝文獻學を獨佛的意義に於て用ひる事にする。

文獻學の歴史。　ギリシア時代――古代に於て文獻學は文學殊に詩の批判を以て始つた。例へば Xenophanes がホーマー及びヘジオドを取扱つた時に既にその萠芽を見るのである。ソフィストが懷疑的哲學を起して論證の法にその興味を集中した時に彼等の哲學的思索は名稱と名稱を附せられたものとの間の關係に對して向けられ、言語の有する便宜的意義を排してその眞の內的意義（ἔτυμολογία）を決定せんとしたのである。こゝに語源論品詞論が樹立された。言語の正しき使用法の問題（ὀρθοέπεια）がこれであつて、これは Protagoras (c. 485—415 B. C.)等の提唱する所であつた。(Plato, Phaedrus 267 C.) この問題が發展して其處に文章中に於ける言語の機能が考慮に登るに至り術語學を生ぜしめた。Plato (427—347 B. C.) にあつては既に ὄνομα と ῥῆμα とが區別されてゐた。しかしその意味する所は名詞及び動詞と云ふよりも主語と述語と云ふ程の意であつた。(cf. Plato, Sophist. 261;「音聲によつてあらはされる所のものに二種あり、一つは行動そのものを指すものであつてこれを動詞と名附け、他は行動を爲すものをあらはし卽ち名詞之なり」。(cf. Cratyl. 425 A., Aristoph. Nub. 681 sqq.)。　次でアリストテレスは ὄνομα, ῥῆμα, ἄρθρον (Poet. xxi. 7) σύνδεσμος (Rhet. iii., 5. 2, etc.) を區別し各名詞、動詞、冠詞、接續詞をあらはしたのである。かく文獻學がこの發生の地ギリシアに於て與へられた意義はむしろ文法の範圍に屬せしむべきものであつた。而して文獻學がその眞の姿を取るに至つたのは、次で學術の中心地となつたアレキサンドリアに於てであつた。

アレキサンドリア時代〔前三〇〇—一〕。アレキサンドリアは前三三一年アレキサンダー大王の創設した町で、大王の死後その領土が四將間に分割された時アレキサンドリアはトレミー王朝支配下のエジプトの首府となつた。Ptolemy Soter (323—285 B. C.) と Ptolemy Philadelphus (285—247 B. C.) が此處に二個の圖書館と一個の博物館を建設して以來、この地は當時の西歐世界の文學、學術の一大中心地となつた。この圖書館の中に文獻學は培はれたのである。初代の圖書館長は Zenodotus of Ephesus (c. 325—260 B.C.) であつて彼は敍事詩、抒情詩を集成しイリアド、オデッセーを校訂した。彼は又多くの文書を集めホーマー註釋集 (ὁμηρικαὶ Γλῶσσαι) を編纂し、その他ヘシオド、アナクレオン、ピンダーを取扱つた。然し彼の批判法は餘りに主觀が勝過ぎて過誤に陷ることが少くなかつた。又彼の下にあつて Alexander Aetolus は悲劇を Lycophron は喜劇を類集した。

圖書館長として Zenodotus を繼いだものは Callimachus と傳へられてゐる。彼は全藏書の大整理と目錄 (πίνακες) 作成を系統的に企てた。長い卷物を一々擴げて讀む手數を省くために大長卷作を細分し短い數卷數冊に分けて今日見る卷數別を制定したのである。又彼自身詩人であつた。次の圖書館長は Eratosthenes of Cyrene (c. 275—195 B.C.) であつて彼は二三五年頃就任した。頗る多方面の人で地理學、數學、天文學、年代學をよくし人彼を呼んで五種競と云つたが又他面嘲笑的に Beta と名附けた。何れの方面に於ても第一人者たり得なかつた事を指したものである。彼の文獻學者としての功績は初期アテネの喜劇 (περὶ τῆς ἀρχαίας Κωμῳδίας) に關する論文である。次代圖書館長は Aristophanes of Byzantium で西紀前一九五年に就任した。彼はホーマー、ピンダー、エウ

リピデス、アリストファネスを編輯し其他批評學上の記號（Olelus, sigma, antisigma）を制定し抑揚法を明かにし、抒情詩をその各節に句切つてΚῶλα（歌節）に分つた。又アリストテレスの博物學の概略を作つた。彼に繼いで圖書館長になつたのはAristarchus of Samothrace（c. 217—145 B. C.）で彼こそこの時代の文獻學者の典型とも云ふべく今尚名聲を博してゐる。ホーマーの集成二種を出しこのうちに於て彼は「ホーマーによつてホーマーを解釋せよ」（ὅμηρον ἐξ ὁμήρου σαφηνίζειν）の原理を旨としたのである。更にヘジオドを編纂し抒情詩、悲劇作家、ヘロドトス、アリストファネスの正文を校訂して二種の註釋書（ὑπομνήματα）及び特種問題に關する論文（συγγράμματα）を出した。八種の品詞、ὄνομα（名詞）ῥῆμα（動詞）ἀντωνυμια（代名詞）ἐπίρρημα（副詞）μετοχή（分詞）ἄρθρον（冠詞）σύνδεσμος（接續詞）πρόθεσις（前置詞）を

定めたのも彼である（Quintil. i. 4. 20）。彼の弟子Dionysius of Thrax（c. 170—90 B. C.）はギリシア文典（Τέχνη Γραμματική）を著し、その構想はルネサンスに至る迄踏襲され、今尚一般文典の最高模範となつてゐる。彼はその業とする所によつてχαλέντερος（銅鑛掘り）と渾名されホーマー、ヘジオド、ピンダー、バッキリデス、ツキヂデス及び喜劇作家、アテネの諸雄辯家の著作を編纂した。

後期アレキサンドリア時代（第一世紀乃至第四世紀）。　Dionysius of Halicarnassus（前二〇年以來ローマに住す）は文學批判に關して價値ある種々の作品を殘した。Letters to Ammaeus I and II, De Compositione Verbarum, De Oratoribus Antiquis, Letter to Pompeius, etc.「崇高に關して」（Περὶ ὕψους）は現存する作品であるが、恐らく紀元第一世紀に書れたものであらう。Appollonius Dyscolus（c. 130）は文章論に就いてすぐれた論說

四卷を著してゐるが是等は皆現存する。この時代の最も著しい特徴は辭書編纂及び類似の諸事業がなされた事であつて Moeris, Phrynichus, Harpocration, Pollux, Hesychius, Stephanus 等の手によつて遂行された。尙第二世紀の Ahenaeus の卓上哲學者によつてなされた種々の珍貴な報告が存し、ギリシアの滑稽詩の現存せる諸斷片は多くこのうちにその源を存するのである。Libanius (c. 341—393) はデモステネスの生涯及び彼の辯論の著者である。

中世期（第四世紀乃至第十四世紀）。　ギリシア語及び文學の諸斷片は中世期を通じてビザンチウム帝國に保存された。諸種の編纂事業も時折試みられ、九世紀の Photius 十世紀の Suidas 十二世紀の Eustathius 等の手に成るものには見るべきものがある。西歐に於てラテン語は教會及び國家の公用語として用ひられ少數の古典も讀まれた。學術は徹頭徹尾哲學的神學的であつて、カロリンガ朝及びオットー系諸帝の時代に一時振興されたが見るべきものなくして止んだ。ラテン文學は僧院に保存されたがギリシア文學は無視された。

イタリーに於けるルネサンス時代　（一三五〇—一五二七）。　ルネサンスと共に文獻學にも新境地が開拓された。古典時代に對する興味は、同時に碑銘、古泉、古代美術及び古代建築の廢址に對する興味を喚起した。この傾向に對して最初の刺戟を與へたのは Petrarca (1304—74) 及び Boccacio (1313—75) である。然し彼等は古典世界に興味をもつたが古典語の專門家ではなかつた。Manuel Chrysoloras (1350—1415) はギリシアの移民であつたが、一三九六年から一四〇〇年迄フロレンスでギリシア語を教へた。この機運に促されて Gemistus Plethon (1355—1452) が又ギリシアから來住した。Cosimo di Medici は彼のためにプラト

ー研究のアカデミーを建設した。彼の門弟トレビゾンド生れの Joannes Bessarion (1403—72) はギリシア及びローマ教會を結合するためにギリシア皇帝に從つて一四三九年イタリーに渡來した。ローマ教會に合流後彼はフラスカチの司教にあげられた。後一四七二年ラヴェンナに死んだが彼の蒐集に成る古文書の集成をヴェニスのサン・マルコ圖書館に遺贈した。Theodorus Gaza of Thessalonica (c. 1400—c. 1478) は一時フェララでギリシア語を教へ後ちローマ及びナポリに赴いた。その著ギリシア語文典は Aldus Manutius の手によつて一四九五年ヴェニスに於て出版された。彼は又アリストテレスの Aelian Theophrastus De Plantis 及びヂオニシウスの De Camp. Verbarum の飜譯をした。Demetrius Chalcondylas (1428—1510) はホーマー、イソクラテス、スイダスを編纂し Laurentius Valla (1407—57) はホーマー、ヘロドトス、ツキヂデスを飜譯した。ルネサンス最大の文獻學者は Petrus Victorius (1499—1584) であつた。彼はソフォクレス、イセウス、アリストテレスの修辭學、詩論、倫理學、政治學、キケロ、テレンチウス、サルスツス、ヴァロの De Re Rustica 等を編纂した。Poggio Bracciolini (1380—1459) は古文書の蒐集をなし、彼の發見にかゝるラテン語の古文書は非常に多い。Giovanni Aurisha (c. 1370—1459) は一四二三年ヴェニスへ二三八の古文書を將來した。イリアドの Venetus A. 及びエスキロスの Codex Laurentianus, ソフォクレスの Apollonius Phodius 等を含んでゐる。Constantin Lascaris のギリシア語文典 (Ἐρωτήματα) は Paravisinus の手により一四七六年ミラノに於て出版された。之は全部ギリシア語で印刷されたものの嚆矢とも云ふべきである。ルネサンスの風潮がドイツに傳播して其地に Erasmus (1467—1536) Melanchthon

(1497—1560)等のすぐれた文獻學者を生んだが相次で起つた戰亂、宗教戰爭の渦中に一切は投ぜられ學術も神學の下に屈して進歩を止めた。

フランス時代(一五三〇—一七〇〇)。この時代は古典作家の形式を研究するよりも内容如何を問題にするに至り特に法律研究にその興味が集中された。フランシス一世はコレージュ・ド・フランスを設立して斯學の發達を圖つた。この時代の學者の主なものは次の如きものである。

Budaeus (1457—1540), Robert (1503—69), Henri Etienne(1528—98),Turnebus(1512—65), Casaubon (1559—1614), Joseph Justus Schaliger (1540—1609), Du Cange (1610—88).

イギリス及びオランダ時代(十八世紀)。この時代はフランスの先蹤を追うて形式よりも内容を問題とし單に古典の辭句の解釋に止まらずその歴史的文學的研究が行はれたのである。イギリスに於ける主要學者は Richard Bentley(1662—1742) Richard Parsonであつてオランダに於てはEzechiel Spanheim (1629—1710), the elder Burmans (1668—1741), the younger Burmans (1714—78), Hemsterhuis (1685—1766), Valckenaer (1715—85), Wyttenbach (1746—1820) 等である。

ドイツ時代(十九世紀)。ドイツは三十年戰爭及び宗教戰爭によつて學術の進歩が一時停滯し、文獻學研究も中絶して居たが、ネオ・フマニスムスの運動が起るに及んで文獻學も盛となり、斯學に新生命を吹き込んだ。Winckelmann (1717—68) の Die Geschichte der Kunst des Altertums は藝術學を創始すると共に考古學の直接の祖となつた。F. A. Wolf (1759—1824) は Prolegomena ad Homerum, 1795 に於てホーマーの詩篇が一人の手で成つたものでない事を證明して正文批判の上に一時期を劃し、こゝに於て文獻學は二つの方面に分た

れた。一つは歴史的考古學的のものであり他は正文批判及び文法的のものである。前者を代表するものはB. G. Niebuhr (1776—1831), August Boeckh (1875—1867), K. O. Müller (1797—1840), Otto Jahn (1813—69), Theodor Mommsen (1817—1903) であり、後者を代表するものは G. Hermann (1772—1848), Lobeck (1781—1860), Immanuel Bekker (1785—1871) であつた。

現代。かゝる文獻學の發達は一つに古文書の蒐集・編纂を盛ならしめ Monumenta germaniae historica を始め幾多の古文書集、碑銘集を出して史學に益する所が多かつた。同時に古文書館も開放せられてその内容も整備するに至つた。一方一般考古學的方面に對しても著しく興味が喚起され一八二九年ローマに考古學協會が設立せられて以來斯學の異常なる發展を見、ローマ、アテネの二所に各國の學會が常設せられ、各種の發掘事業が相次で行はれた。即ちフランスの學會はローマに一八四六年、アテネに一八七三年、米國のそれは一八八二年及び一八九五年に、英國のそれは一八八三年及び一九〇一年にそれ〴〵設立せられ、トロイ、デルフィ、ミケネ、チリンス、スパルタ、オリンピヤ、エピダウルス、ドドナ、デロス、クリートに永續的發掘が行はれ、吾人の豫想外の成果を齎し從來の史學を一變せしめるに至つた。更にエジプトに於けるパピルスの發見は古代ギリシア文學に對して貢獻する所多く、一例を擧ぐればアリストテレスのアテネ憲法 (1891) Herondas (1891) Bacchylides (1897) 等を再現せしめたのみならず、ギリシア語新約聖書の眞の性質を闡明にする上に多大の光明を與へた。尚又考古學の部門に屬する人類學の方面に於てなされた原始民族の宗教儀式の研究は古典研究の上に著しい影響を及ぼした。從來は古典諸作家の文學的方面のみが對象とされ

主として正文批判及びその形式が論ぜられた。その結果、文學的の價値の高い第一流の作品のみが問題となつたのであつて、文學的に劣るものは、譬へそれが考古學的に見て貴重なる史料を提供するものであつても、無視せられ來つたのである。然るに一度考古學及び人類學が起るや、これ等の作品は再檢討されて幾多の得難い報告が齎され、原始民族の信仰・制度の比較研究の上に、長足の進歩を來さしめたのである。

× × ×

以上の歴史に見るに文獻學の史學方法の上に及ぼした功績は史料の蒐集分類及び批判法を確立した點にある。史家はかく蒐集批判された史料に對して更に史的解釋を加へ、引いては史的價値を定めるのである。此處に史學と文獻學との差が見出されるのであつて、文獻學は材料研究に終始するが、史學に於てはこの研究された結果を更に史的見地から批判を下すのであつて、こゝに考證より出でて考察への傾向が強く窺はれるのである。かかる意義に於て文獻學を史學に導き入れて最初に成功したものは Niebuhr であつた。

本論　ニーブール、ランケ編（未成稿）